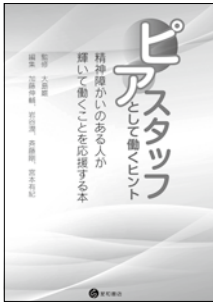


## ■ 書 評



### ピアスタッフとして働くヒント —精神障がいのある人が輝いて働くことを応援する本—

大島 巖 監修  
加藤伸輔, 岩谷 潤,  
斉藤 剛, 宮本有紀 編集  
星和書店  
2019年9月 280頁  
本体価格 2,400円+税

本書は「最近よく聞くピアスタッフって何?」「もっと患者さんに役立つ治療をしたいけれど何かいい方法はないの?」「デイケアがマンネリになっておもしろくないとスタッフもいっている」などの疑問を持っている方におすすめの本である。本の題名からしてピアスタッフを読む本のように感じるが、中身はピアスタッフのおもしろさ、支援の場を変える力の秘密がたくさんつまっている。

ピアスタッフというのは、本書によれば「精神障がいや疾患を通して得た自身の経験を生かして、事業所等と雇用契約(常勤, 非常勤を問わず)を締結し、利用者のリカバリーに資する職員」となっている。ピアサポーター, ピアなどとも呼ばれ、精神障害を持つ人のリカバリーをサポートする存在として世界各地で注目を浴びており、わが国でもその数が増えてきている。

どんな役割をする人かをイメージするために、知り合いの精神科医の体験を例に挙げたい。彼は肺がんを告げられ、主治医からくわしいエビデンスと共に、いくつかの治療の選択肢を提示された。治療に伴う副作用についても詳細な説明があった。しかし彼は呆然と自分の前に広がる暗闇を見つめていて、頭がエビデンスの数字を受け付けられない状態だった。妻も途方に暮れた気持ちだった。たまたま病院の窓口で、がんサバイバーが相談窓口を開いていたので立ち寄ってみたところ、はじめてがんをかかえることになった気持ちについてじっくり聞いてくれ、自分の体験も話してくれた。治療により生活にどのような影響があるか、心身にどんな変化があるか、まわりの接し方なども話してくれ、彼も妻もやっと自分たちの進む道が見えてき

た。医学的な知識や数値だけではなく、自分の生活がどう変わっていくのかということも彼も妻も知っていたし、そうした気持ちをいっしょの目線で話し合っただけだったのである。ピアサポーターはそうした役割をする人たちである。

本書の第1章は、ピアサポートや当事者性とは何かについて語られている。第2章はスタッフに関する研究や日本の医療・福祉におけるピアスタッフのおかれている実態が述べられる。第3章はピアスタッフの具体的な仕事と役割であり、第4章ピアスタッフの現状の働き方、第5章ピアスタッフの可能性、第6章働いていく上での課題と対応、第7章今後の展望という章立てで、ピアスタッフをめぐる人のためのわかりやすい入門編となっているが、本書の執筆者がピアスタッフ自身であったり、ピアスタッフを直接雇用したりいっしょに働いている人であったりするところから、現場で起こっている体験がたくさん語られており、ピアスタッフについて知りたい専門家にとってもおもしろい読み物になっている。各章いずれも、比較的短い項目で具体的な体験が語られているので読みやすいのも長所である。しかし繰り返し似たテーマが異なる執筆者によって語られ、短い文章の中では十分課題が掘り下げられていない点は残念に感じた。

第7章の展望、および最後につけられた座談会では、いろいろな立場の人がピアスタッフの可能性や今後について語っていて、評者には読んでいて一番興味深い箇所だった。精神医療が進んでいくことによって、いずれピアスタッフが必要とされない時代が来るかもしれないとの意見が語られていたが、先ほどのがんを罹患した精神科医の例に戻るまでもなく、医療が高度になればなるほど、医学知識や治療は、罹患している人の人生や個性と離れていってしまう可能性があり、同じ体験をしている人の目線は依然として必要なのではないかと評者は感じた。

いずれにしても、現在の専門家が提供する精神医療という立場からだけではなく、患者さんたちの立場からみても、よりよい精神科臨床サービスを提供しようとするときに、ピアスタッフは切り札の一つとってよいだろう。そうした関心に応えてくれる良書である。

(池淵恵美)